

中間報告書（平成 22 年度）

提出者 秋津元輝

提出年月日 2011 年 4 月 6 日

【プロジェクト名】

和文： コミュニティ・中間圏研究

英文： Study on Community and Intermediate Sphere

【メンバー構成】

研究代表者 秋津元輝

幹事 （未定）

メンバー 秋津元輝、森本一彦、中田英樹、猪俣祐介、網中奈美江、中山大将、平井芽阿里、山本達也、松井智子、越智正樹（農学研究科博士課程）、本田恭子（同前）、柴田悠（日本学術振興会特別研究員）

【ねらいと目的】（600 字程度）

定義次第で社会を親密圏と公共圏に二分することも可能だろうが、現実には両圏の特徴を併せもった中間圏ともいうべき領域が存在し、コミュニティと呼ばれる集合体はその代表といえる。コミュニティは近代社会研究のなかで再発見され、その否定と肯定が多様な脈絡において繰り返されてきた。本プロジェクトではコミュニティを、形や性質を変えながらも存続し親密圏と公共圏を結びつける普遍的な圏域として設定し、その生成、展開、特質を明らかにしつつ、親密圏／公共圏の再編成過程におけるコミュニティ＝中間圏の意義について考察する。したがって、コミュニティを人間とそれが結びあう基礎的關係、すなわち共同態として考えるのではなく、その発想を考慮しつつも、親密圏／公共圏と対比可能な圏域をもつものとして設定したい。その場合の有効なコミュニティ定義のあり方を考察することも本プロジェクトの目的である。

研究方法としてはフィールドワークによってえられた具体的な事例を通じて課題にアプローチする。各メンバーは自らの対象フィールドにおいて、親密圏とコミュニティとの間、および公共圏とコミュニティとの間の揺らぎを考察するのにふさわしい事例を選別して素材とするが、他方で合同調査を実施して、事例の共有と相互の認識のズレの確認をおこない、次世代研究者らに共同研究体験の場を提供したい。

【活動の記録】

研究準備ワークショップ（第 1 回：2010 年 5 月 10 日、第 2 回：2010 年 6 月 3 日）

コミュニティの定義と研究報告に関する討議と打合せ

第 1 回研究会（2010 年 7 月 5 日）

テーマ：「生成するコミュニティと場所性」

報告者：1. 柴田 悠（日本学術振興会特別研究員）

「都市におけるコミュニティの潜在力—社会運動としてのコレクティブハウジング—」

2. 網中 奈美江（GCOE 研究員）

「農業を中心とした共同体の理想と現実—シュタイナー、メノナイトの思想に基づくコミュニティの事

例報告一]

第2回コアプロジェクト研究会（2010年11月8日）

報告者：秋津元輝（京都大学農学研究科）

「コミュニティ研究の位置取りと成果への道」

第2回研究会（2010年11月10日）

テーマ：「生成（devenir）のコミュニティ-人類学的研究の前線を学ぶ」

報告者：田辺繁治（国立民族学博物館名誉教授）

「情動的コミュニティについて —北タイ・エイズ自助グループの事例から—」

Global COE Symposium “Reconstruction of Public Spheres”, Dec. 13, 2010

Session II, “Reimagining Community: State Agency or Romantic Entity or ...”

1. Cho Oakla (Sogang University, Korea)

“New Communities in Rural Korea”

2. Q. Forrest Zhang (Singapore Management University)

“Village Communities in China’s Agrarian Transition: Dissolution and Resilience”

3. Apinya Feungfusakul

“Mass Meditation in Contemporary Thailand: Emerging Communities in Globalized context”

4. Taro Futamura

“Challenges and Prospects of Japanese Rural Communities”

合同調査（2011年3月3～5日）

調査参加者：秋津元輝、網中奈美江、平井芽阿里、山本達也、越智正樹、本田恭子、柴田悠

調査地：「木の花ファミリー」（静岡県富士宮市）、長野県大滝村

調査目的：intended communityの実態とそこにおける親密性／公共性の関係性について、「木の花ファミリー」を事例として考察すること、およびIターン移住者の多い農村社会における社会関係の変容について、大滝村を事例として考察すること。さらに、メンバー間で調査経験を共有することによって、コミュニティ分析のための共通理解を高める。

【成果の概要】（800 字程度）

2 回にわたる研究準備ワークショップにおいて、共同態の関係という人間の基礎的社会的結合様式を含めつつも、このプロジェクトでは人びとの具体的な集合体としてのコミュニティを対象化することを確認した。その場合、人びとの帰属ということを大きな枠組みとしながら（デランティ、2006）、運命的な束縛のコミュニティ／生成するコミュニティという対比、それらを支え誘発する場所・モノ・五感への着目などが議論された。続けて開始した研究会では生成するコミュニティに光を当て、都市におけるコレクティブハウス、農村におけるエコヴィレッジに関する予備的な調査結果を共有した。

さらに、生成するコミュニティについての方法論的検討の必要に迫られ、人類学の伝統からコミュニティの生成問題にアプローチしている田辺繁治氏を迎えて、第 2 回の研究会を開催した。田辺氏はコミュニティ生成の局面で現れる「情動コミュニティ」に着目し、それは人間の生と実践に基づくがゆえに、外部権力への能動的順応をこえた内在的な力をもつと述べた。そうした意義をもつ「情動コミュニティ」を常に生成状態にするために、「出会いの組織化」が有効であるという指摘も興味深い。具体的なコミュニティを生存の視角から考えるだけでなく、「生」のレベルでの共鳴と情動、それを誘引する出会いにまで一歩踏み込んで考察する視点をえた。

富士宮市の「木の花ファミリー」、長野県大鹿村での合同調査は、調査内容もさることながら、調査体験を共有したことに大きな成果があった。「木の花ファミリー」は日本では数少ない精神性を含んだエコビレッジとして、世界に情報が発信されている。70 名ほどのメンバーがひとつの家族として、生産・家事・育児労働とその成果を共有しながら生活している。短い訪問なので、そこにおける共同性の生成にまで踏み込むことはむずかしかったが、現代社会における「生」の問題がこのコミュニティの根底を支えていることを垣間見ることができた。この調査の成果については、次年度早々に研究会をおこなってメンバーで共有する計画である。

・デランティ・G（山之内・伊藤訳）、2006、コミュニティグローバル化と社会理論の変容、NTT 出版。

【通信欄】

--

(事務局記入欄)

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	(千円)	実績額